

1793 寛政三陸地震津波と 1856 安政三陸(八戸沖)地震津波の

仙台藩を中心とした地域における被害

東北大学災害科学国際研究所* 安田容子

Damages from the 1794 Kansei Sanriku and the 1856 Ansei Sanriku (Off Hachinohe) Earthquakes and Tsunamis around Sendai Domain Area

Yoko YASUDA

International Research Institute of Disaster Science, Tohoku University

6-6-4 Aramaki-Aza-Aoba, Aoba-ku, Sendai 980-8579, Japan

According to records of historical documents, about 20 tsunamis hit and damaged livelihoods of Miyagi coastal area from 1611 to 2011. In this study, I discuss two earthquakes and following tsunamis, the 1793 Kansei Sanriku and the 1856 Ansei Sanriku (Off Hachinohe) Earthquakes and Tsunamis, based on comparison of historical documents about these two disasters that record damages and aftermath human activities. In 1793, severe aftershock activity over 10 shocks per day was continued for about 3 months. Inland Sendai plain area, they suffered huge damage to buildings. At the city area, buildings collapsed in the earthquake and people were crushed to death by collapses. In the coastal area, over 300 houses were swept up by the tsunami that was generated by the earthquake. Southern Miyagi coastal area had no record about tsunami in 1793. But, it is considered that Southern Miyagi coastal area had damaged by tsunami in 1793, because Fukushima and Chiba coastal area had historical records about damage and human suffering. The damage about buildings and human lives from the 1856 Ansei Earthquake and Tsunami was less serious than that from the 1793 Kansei Earthquake and Tsunami. But in 1856, huge tsunami flood caused serious damage to the crops. In 1856, tsunami widely flooded over rice fields of costal area and affected the coastal area people's livelihoods. Both in 1793 and 1856, Miyagi area had suffered huge damage by earthquake and tsunami. These two earthquakes and tsunamis have different characteristics.

Keywords: Historical Earthquake, 1793 Kansei Sanriku Earthquake, 1856 Ansei Sanriku (Off Hachinohe) Earthquake, Sendai Domain, Historical Documents

§ 1. はじめに

宮城県は、過去においても、地震や津波が頻発していた地域である。また当該地域には、近世以降の記録が大量に残っており、宮城県沖地震をはじめ、江戸時代においては、地震が何度も発生していることが、記録より読み取ることが出来る。本研究では、地震現象の頻度ではなく、宮城県の人々が生活の中で受ける地震や津波の被害の頻度に着目する。

江戸時代後期において、宮城県で特に被害の大きかった地震を 5 つあげてみると、1767 安永地震、1793 寛政三陸地震津波、1835 天保地震、1856 安政三陸(八戸沖)地震津波、1861 文久地震がある。これらの地震の間隔から、50 年以内の間隔で、人々は地震の被害を受けていることになる。そのうち、1793 寛

政三陸地震津波と、1856 安政三陸(八戸沖)地震津波は、どちらも地震の後に津波が沿岸部を襲った地震である。

宮城県を襲った津波の中でも、江戸時代以降、人命や田畑や漁業施設など人々の生活に対して被害の記録が残されている津波を対象にすると、表 1 の通りである。平均すると、およそ 20 年おきに、宮城県沿岸部の人々は、規模の違いはあるが、津波被害を受けてきたといえる。チリ沖地震津波のように、遠地を震源とする地震の津波のなかにも、人々に大きな被害を及ぼしている津波もある。

本研究では、宮城県を襲った過去の地震の中から、津波を伴い、大きな被害を及ぼした寛政五年の 1793

* 〒980-8579 仙台市青葉区荒巻字青葉 6-6-4
電子メール: yyasuda@irides.tohoku.ac.jp

寛政三陸地震津波(以下、寛政地震および寛政津波)と、安政三年の1856 安政三陸(八戸沖)地震津波(以下、安政地震および安政津波)を対象にする。寛政地震の63年後に安政地震が起こっていることから、安政地震の時に、寛政地震を記憶している人もいたと考えられる。両者を比較することで、地震と津波の被害状況や、人々の動きを明らかにすることを目的とする。寛政地震と安政地震については、瀬川(2012)のように、岩手県を対象に比較した研究がある。本研究では、旧仙台藩領を対象地域として、宮城県を中心とした地域における、寛政五年の地震について、安政三年の地震と比較し、考察を行う。

対象とした資料は、歴史資料を集めたデータ集である『日本地震史料』(武者金吉編, 1941, 1951), 『新収日本地震史料』(東京大学地震研究所編, 1984, 1985, 1989, 1993;以下に引用する際には、巻数と収録頁のみを示す。『新収日本地震史料 補遺』と『新収日本地震史料 続補遺』の巻数は、「補遺」、「続補遺」と表記する。), 『日本の歴史地震史料 拾遺』(宇佐美龍夫編, 1998, 2012;以下に引用する際には「拾遺」とし、巻数と収録頁を示す。)に収録された資料記事を用いた。

§ 2. 1793 寛政地震の特徴と被害

2.1 寛政地震の特徴

寛政五年一月七日(1793年2月17日)の午刻(正午)過ぎに東北地方をM8.2と推定される大地震が襲い、その約半時後には三陸沿岸を中心に、沿岸部に大津波が押し寄せた。この地震は、余震回数が多いことから、宇佐美・他(2013)によって、2011年の東北地方太平洋沖地震と類似した地震であると指摘されている地震である。

この地震の規模や震源については、宇佐美(1978)や、羽鳥(1987)による研究がある。行谷ほか(2003)による浸水高の調査からは、岩手県南部から宮城県北部にかけて、浸水高が4~5m級の津波が襲ったこと、さらに、宮城県沖(金華山沖)を震源とする地震であったことが指摘されている。地震調査研究推進本部地震調査委員会(2011)によれば、109年おきに繰り返す三陸南部海溝寄りの地震であり、三陸南部海溝寄りと宮城県沖で連動した可能性が指摘されている。

寛政地震は、上余田村(名取市増田)の香積院文書『永禄以来当院記録年鑑』(続補遺 p424)と、川俣町の村役人であり、商人でもあった渡辺弥平治家の

記録『累世年鑑』(続補遺 p426)において、「百年以来之大地震」という表現があることから、当時、非常に大きな震動が感じられていたことがわかる。さらに、『累世年鑑』には、地震が一時ほども続いたことから、「前代未聞之大永地震」と表現されており、長時間震動が続いた地震であったといえる。

資料における地震の記録は、宮城県周辺にとどまらず、青森県や、東京都、新潟県にも残っている。江戸の杉田玄白の日記『鶴斎日録』(補遺 p597)の七日の記事に、「八ツ時過大地震両度、夜へ懸都合十三度」とあることから、広い範囲で大きな震動と、1日のうちに数回に及ぶ震動が感じられた地震であった。

2.2 寛政地震の余震

寛政地震は、推定M8.2の非常に大きな地震であっただけでなく、その後の余震回数が多く、長期間にわたって地震が続いた地震である。福島県相馬市の『中村藩新妻蔭常手記』(第四巻 p58-61)には、「寛政五癸丑正月七日地震覚」として、寛政五年の十月までの地震回数についての記録がある。同書には、十月までに178回の地震があったことが記録されている。

登米町(現登米市登米町、本論では登米と表記)の『福久日記』と、近隣に位置する迫町(現登米市迫町、本論では佐沼と表記)における『元和元年より歳之吉凶留帳』(第四巻 p57)の記録、さらに相馬の『中村藩新妻蔭常手記』「寛政五癸丑正月七日地震覚」における地震回数の記録から、三月末までの毎日の地震回数を図1に示す。地震発生後3日までは、登米と佐沼では1日に30回以上、相馬では1日に10回以上の地震が感じられ、三月までほぼ毎日数回の地震が感じられている。

登米町の『福久日記』(補遺 p593-596)には、寛政地震について、地震後の余震を含め詳細に残されている。寛政五年一月七日には、昼九つ時に「大地震」、九つ半に「大巖地震」があり、昼には50回程、夜には20回の地震があった。一月七日の地震の後、数日間は1日に10回以上の地震が三月までほぼ毎日のように続き、その後も月に数度の頻度で十二月まで続いていた。一月七日の地震以降、寛政五年中、地震のあった日は90日あり、そのうち、「大地震」という記録は10回を数え、地震回数の少ない七月と八月にも「大地震」の記録がみられた。余震は一月から三月にかけて集中し、その後も十月ころまで、1日に1回から数回程度、「地震」や「地震少しゆる」、「少し間地震」

など、長さや大きさの異なる地震が続いていた。

2.3 仙台藩における寛政地震の被害

地震の被害状況についてみると、仙台藩内の被害は、壓死 12 人、家屋の倒壊 1060 余であったと『治家記録』(続補遺 p424)にみえる。ただし、津波による流失や溺死等の被害はこの数には含まれていないと考えられる。

仙台藩を中心とした各地の被害状況については、図 2 の通りである。登米の『福久日記』では、七日の記事において、米岡町(登米市米山)の被害が大きく、居家 46 軒が倒壊したことが、年礼の挨拶に行った者から知らされている。登米では、10 軒程が倒壊し、屋根を損じた家が無数にあり、屋根の落下により男女 2 人が死亡した。一月八日には、寺崎町(石巻市桃生町寺崎)で 20 軒程が倒壊したという情報が入っている。さらに、一月十三日には、鹿又町(石巻市桃生町鹿又)で残り家が 3 軒になり、古河町(大崎市古川)でも米岡町と同様の被害があったことが知らされている。また、登米においては、地震による怪我人はなかったが、七日から十三日の間に、数百人が地震のため気を失ったと記される。

古川と鹿又についての被害は、ほかの記録においてもみられる。古川の『岩崎家三代記録』(続補遺 p425)には、以下のようにある。

所々家相倒、清酒屋ニ而造込置候酒震こほれ、
産婦等血暈いたし、縁側より転落候而怪我等仕
候婦女子も多く有之事に相聞仕候、

各地の家が倒れ、清酒屋では樽から酒がゆりこぼれるほどの震動であった。また、古川においても、登米と同様、怪我人や気絶した人も多かった。鹿又の被害については、杉田玄白『鶴齋日録』(補遺 p597)二月十日の記事に、桃生郡鹿又で 30 軒程が将棋倒しになったことが知らされている。これらの記録より、宮城県北部の内陸平野部における建物被害は、100 軒以上あったとみることができる。

一方、仙台市内をはじめ、県南部の平野部においても地震による被害は大きかった。東照宮では、石灯籠・金灯籠ともに倒れ返っただけでなく、本殿も修復が必要なほどの被害を受けたことが、仙岳院文書『日鑑』(拾遺 p172)にみえる。また、『鶴齋日録』と情報源を同じくするとみられる『永書一二九』(第四卷 p56)には、武家屋敷の長屋の屋根瓦が落下したほか、芭

蕉の辻の雁金屋など多数の店が倒壊するなど、仙台市内において数々の損害と死者があったことが記される。「百年以来之大地震」と記していた上余田村(名取市増田)の香積院文書『永禄以来当院記録年鑑』(続補遺 p424)には、「所々棟梁折れて壁等倒崩れ」というように、建物の被害状況が記録されている。

§3. 寛政地震の津波被害

3.1 仙台藩における津波被害

寛政地震後に発生した津波については、青森県八戸市から千葉県旭市の間に記録が残っている。仙台藩領については、現時点では、岩手県大船渡市から牡鹿半島までの間に記録や伝聞記録が残っていることが確認されているが、宮城県南部の平野部における津波被害についての記録は未見である。

岩手県宮古市を中心とした地域の被害記録を記した『古実伝書記』(第四卷 p47-48)には、「南程おびただしく」と、仙台藩領での被害が大きかったとして、仙台藩における被害について、以下のように記す。

綾里浦七八拾軒流失、気仙沼浦三百軒余流失、
鮫浦拾軒程流失、人馬不知、其外いつ嶋之内
所々痛み御座候由、暄と知不申候。

伝聞ではあるが、綾里(岩手県大船渡市)で 80 軒ほど、気仙沼で 300 軒、牡鹿半島の鮫浦では 10 軒が津波によって流失したという被害が記録されている。

また、雄勝の肝入であった山下家の記録である『山下家先祖代々記』(第五卷 p248)には、雄勝地方における 1856 年の安政地震の津波被害についての記録が残されている。「何れに其節六十四、五年先の津波よりは、一尺くらいも高く水押候事に相見得申し候」と、安政三年より 63 年前にあたる寛政五年の津波被害に言及している。同書によれば、安政地震の津波は、「居家より三尺高く水押揚げ」とあり、床上 0.9m 以上の浸水であった。寛政地震の津波は、それより一尺くらい低いことから、床上 0.6m 以上の浸水であったといえる。

『唐桑町史』(唐桑町史編纂委員会、1968)所収の、小原木(気仙沼市唐桑町。以下、唐桑)の肝入伊藤家の代々にわたる記録『永代手鏡』には、気仙沼から大船渡にかけての地域における被害が記録されている。寛政地震の地震と津波について、次のように記す。

一 寛政五年正月七日大地しん、則大汐参候而湊大騒動、川江計押揚居り、家ニは揚不申、長部村湊、小友、三日市等人家へ五尺程水揚、外大船渡、赤崎、人間痛候。

唐桑においては人家への浸水はなかったようであるが、長部村・小友村・三日市(いずれも岩手県陸前高田市)においては、五尺(1.5m)程の浸水があり、大船渡や赤崎(大船渡市)では人的被害もあったと記される。

岩手県陸前高田市の記録では、今泉の小嶋家文書の『世之中吉凶之事』(補遺 p592)、『年代風唱物語記』(補遺 p593)がある。この2点の資料によれば、長部湊では家の土台より上三尺(0.9m)浸水した一方、長砂海道まで波が押し寄せたとある。行谷ほか(2003)では、これら2点の資料より、陸前高田市での津波高は1.5mであったとしている。また、『年代風唱物語記』では、「長砂今泉辺ハ存外痛なく」と、同じ陸前高田市においても、今泉や長砂では津波被害が少なかったと記している。

大船渡市の被害について、『年代風唱物語記』(補遺 p593)には、大船渡と赤崎の御塩場の石垣がすべて波に取られて平地のようになったとある。津波の被害を受けた直後に、仙台藩は、破損した潮除け土手や塩釜をなおす普請を行っている。特に、大きな被害のあった大船渡村と赤崎村の塩場の普請については、大肝入吉田宇右衛門や組頭が、日々大船渡村と赤崎村を駆け回り、人足への指示など行っていた。この行為が的確に行われたとして、寛政六年(1794)五月八日に、御誉があったことが山路伊八郎より伝えられている(『定留』寛政六年31番:続補遺 p418)。

3.2 仙台藩より南における津波被害

寛政津波の宮城県より南の地域における被害については、福島県相馬市、いわき市と千葉県旭市における被害記録が確認された。

相馬での被害については、『中村藩新妻蔭常手記』「寛政五癸丑正月七日地震覚」によれば、七日の地震が止まったとき、海水が引き、蒲庭では500間から600間も引いたという。仙台領の漁船3艘が巻き込まれ、40人は何とか陸に上がったが、8人が津波に吞まれ行方不明になり、後日4人の死骸が見つかったとある。一方、原釜の浜の人々は、潮が引き、沖の方で波が十丈(30m)もあるかと思えたため、衣類や米を抱えて高い場所へ逃げた。返り波は大きかったが、家な

どは取られなかったようである。人々は九日の昼まで山へ避難していた。また、南郷受戸浜(双葉郡浪江町請戸)では、「波多く有之、家もそんじ、人もけ有之候」と、津波により破損した家もあったことを記す。さらに、「岩城領仙台領ハ津波多く死人も多く有之と聞へ申候」と、仙台と岩城において津波の被害が大きかったことについて聞き及んでいる。

いわき市における被害は、『泉藩家譜』「忠籌公当御代」(第四巻 p61)に、以下のように記録される。

当月七日五半頃地震有之、度々震候、七日昼下川村海何年にも無之汐干にて海草多少、浜にても同様、八時頃強き地震有之、俄に潮来海草取之者共逃る内、左之者逃兼流死之旨申来

七日昼に、下川村の海において潮が引き、海草が見えた。八時過ぎの強い地震の後、潮が来たため、海草取りをしていた者のうち、小浜村の3人が逃げ遅れて流死したことが伝えられた。

寛政地震の津波において、溺死者について記した記録で現存する最南端のものは、飯岡(千葉県旭市)の、向後太郎兵衛家文書『貞享年中より年貢御割附之写帳』(続補遺編 p427)である。午の下刻に大地震があり、その半時後に来襲した津波によって、浦に残っていた船2艘が沖へ流され、海苔やハマグリを採集していた者が津波に遭い、12歳の男子が溺死したが、浜方の者は衣類や食物、諸道具を持って村へ逃げたとある。

仙台藩より南における浜辺の人々は、潮が大き引いたときに山辺へ逃げることで、被害を回避したようであるが、浜で魚介や海藻を採取していた者が被害に遭い、命を落としている。また、相馬沖では、仙台藩領民が津波の被害を受け、溺死者が出ている。

3.3 後世の記録中における寛政地震

寛政地震は、41年後の1835天保地震や、63年後の安政地震など、寛政地震の記憶を持つ人物の存命中に大地震が発生したときには、比較対象として思い出されていた。陸前高田の小嶋家文書内にある、文政年間から天保年間に成立した菅野久助の記録『世間風唱書之事』(補遺 p832)においては、天保六年六月二十五日(1835年7月21日)の地震記事の中で、安永元[明和九]年五月三日(1772年6月3日)の地震と、寛政五年の地震と津波が比較されている。「寛政五年ハ正月七日大地しん毎日五度拾度宛

七日程也、小地しん折々有ル事百日程なり、」と、寛政五年には、余震回数が多く、百日ほど続いたことを記す。さらに、天保六年六月二十五日の後、七月五日(1835年7月30日)の地震のときに余震が続いたことについて、「大地しん有れば小の地しん度々有ル物なり」と、寛政地震のときにも同様に余震回数が多かったことが記憶として取上げられている。

続けて、寛政地震のときには、長部湊の人家へ、五六尺(1.5~1.8m)の高さの波が上がっていたこと、「往古今泉町迄揚りたる事有りしより」と、かつて今泉まで津波が上がったことがあることについて触れている。また、このとき、「往古」としていることから、今泉に津波が上がったのは天保六年の41年前の寛政五年ではなく、それ以前のことでありと読み取れる。寛政五年には、前述の『年代風唱物語記』にあるように、今泉には津波の浸水はなかったといえる。また、『世間風唱書之事』にみられるように、後の津波の被害記録からも、寛政津波は、陸前高田の周辺地域においては、五六尺(1.8m)の浸水被害と記憶されていたといえる。

女川の勇蔵による『萬ふしきの事扣覚帳』(『新収日本地震史料補遺編』には、『勇蔵覚書』として収録)は、寛政十二年(1800)から安政元〔嘉永七〕年(1854)にかけての記録である。日記ではなく、晩年になって重要な事項を抜書し一冊に蒐録したものとされる資料である(宮城県史編纂委員会、1952)。同書において、天保六年(1835)の地震と天保八年(1837)のチリ沖地震津波の時には、寛政地震と津波が、規模の比較対象として記録される。天保六年六月二十五日の地震は、「四十三年先丑の年の地震程には無御座候得共大地震なり」と、寛政五年の地震ほどではなかったが、大地震であったと記す。一方、津波については、天保八年十月十一日(1837年11月8日)のチリ地震津波の項目中に、「四十五年程先の寛政時代の津浪御座候」と、当時の被害の大きさについては記載されないが、寛政年間には津波が女川に来襲したことについての記録が残されている。

§ 4. 安政地震の被害

4.1 安政地震の地震被害

安政三年七月二十三日(1856年8月23日)の地震と津波は、青森県東方沖を震源とする地震であり、岩手県北部や青森県に大きな津波被害を及ぼしている。地震回数の様子から、宇佐美・他(2013)によって、1968年十勝沖地震(1968年5月16日)に似てい

る地震と指摘される地震である。

安政地震の前年の安政二年(1855)には、七月三日(8月15日)と八月三日(9月13日)に、宮城県を中心に、大きな地震が発生している。八月三日の地震は、M7.3と推定され、宇佐美・他(2013)によって、宮城県沖地震の可能性が指摘される地震である。仙台藩士桜田良佐の日記である『桜田良佐日記』(続補遺 p731)によれば、この地震によって、仙台北下の石垣の崩れによって死者があったほか、大崎八幡宮の石灯籠が14基倒れ、秋保温泉の温泉が塞ぎ、翌年二月に再び湧出するまで止まっていたという被害があった。

また、安政二年八月三日の地震は、仙台周辺だけでなく、茨城や千葉の木原村(山武市)でも「大地震」であったと記録されている(『木原村小川家農事日記』:補遺 p995)。仙台藩内においても、『桜田良佐日記』にみられる被害の他にも大きな被害を及ぼしたと考えられる。この震災の復興途中に、安政三年地震とそれに伴う津波が襲ってきたのである。

安政地震の被害について、古川の『永代家事録』(拾遺四ノ下 p1502)には、「酒・醤油・油等ゆりこぼれ損亡多し」と、寛政地震同様に酒や醤油がゆりこぼれる被害があったことについて記されている。しかし、建物の倒壊等の被害については記載されていない。仙台市内においても、『安久津家日記』(拾遺五ノ上 p489)に、「九ツ半頃地震強ク三度続キ揺候事」とあるように、地震についての記事はあるが、その後の被害についての記事は見当たらない。

安政地震の余震については、一日における地震回数は寛政地震ほどではないが、古川の『永代家事録』には、以下のようにある。

○朝四ツ時地震少敷、同九時又震ふ、同九時五分時大地震、南北江三刻斗震ふ、又九時下刻震ふ、其後少宛無幾度震ふ、今夜四時下刻又震ふ。○酒醤油油等ゆりこぼれ損亡多シ。

大地震のあった七月二十三日には、本震の後、5回以上の地震があった。朝五つ、四つ、九つに地震があり、九時五分時には、南北へ三刻(1時間半)ばかりもゆれる大地震があった。さらに九時下刻の地震後、幾度も地震があった。

他の場所については、相馬の『吉田屋覚日記』(第四巻 p250)には、八月から十二月まで、20日地震があったことが記録されている。また、『陸前高田市史』

所収の『気仙村役場文書写』(拾遺五ノ上 p490)には、以下のようにあり、八月一日まで毎日地震があったことについて、寛政地震との共通点を記録している。

六拾二年以前地震ニモ跡先ニテ十日以上モ毎日地震アリト云。当年モ七月廿三日ヨリ八月朔日迄地震毎日有之候。

4.2 安政地震の津波被害

安政地震は、寛政地震と同様に、昼頃(午刻頃)に推定 M7.5 の大地震が発生し、その半時後に津波が来襲している。震源は寛政地震よりも北に位置するため、安政地震と津波の被害記録は、北海道東南岸から牡鹿半島にかけての地域に残されている。

仙台藩領にも津波が押し寄せたことが伝えられている。『皆川家日』(第五巻 p229)によれば、安政三年の津波について「六十年已来の津浪と申候」と、寛政五年以来の大津波であったことが、藤沢町(一関市藤沢町)に入った情報として伝えられている。

古川の『永代家事録』七月二十四日の記事には、「過ル廿三日地震、即十三浜辺海ふぐれにて、雄勝浜人家江海水六尺位押し上り、家財等流失夥敷よし」と、雄勝において六尺(1.8m)の津波が押し寄せ、家財道具が夥しく流失したという情報が入っている。雄勝の『山下家先祖代々記』によれば、雄勝における津波は、床上よりも三尺(0.9m)高く押し上げ、高く押し上げた波は数度にわたり、夜四つ半(午後11時)頃までに14、5度も津波が押し寄せた。10回以上も津波が押し寄せたにもかかわらず、溺死者の記録はない。『山下家先祖代々記』には、続けて、「其時の津波は昼の事にて人畜に怪我無之、夜杯にては不叶事に御座候」と、昼の明るいうちから津波が押し寄せたため、溺死者が少なく、夜ならばこうはいかなかっただろうと記録している。

また、気仙沼の被害について、『皆川家日記』には、「気仙沼は釜の前辺迄水押し塩場の辺大浪にてとられ、地窪の所は田畑之悪水押し込めり」と、釜ノ前(気仙沼市魚町)まで波が押し寄せたことを聞き書きとして記している。さらに、清水川町では、四五尺(1.2～1.5m)の津波が町に押し寄せ、人家には三尺(0.9m)浸水し、田畑への浸水も甚大であったとする。

寛政津波で40軒の流失があった小淵浦では、安政津波による被害は、長沼家文書『続永代御用留(二)』(続補遺 p745)によれば、以下の通りである。

拾六軒板敷方上江水式尺位方壹尺位迄押揚、壁板敷等少々宛破損并搗麦拾五俵程流失罷成、薪小物等少々宛流失罷成申候事。

16軒が敷板から二尺(0.6m)ほどの浸水となったが、壁や床板の破損にとどまり、家屋の流失はなかった。さらに、搗麦15俵が流失するなど、穀類の損害は大きかったとする。しかし、小淵浜を含め、鮫浦など、牡鹿半島のどの浜も「人馬船共ニ一円怪我無御座候事」と、人馬に怪我はなく、船も無事であったことが続いて記される。牡鹿半島においては、人家への浸水被害はあったものの、寛政五年の津波よりも、建物の流失被害は少なかったといえる。

安政津波の犠牲者について、仙台藩において、記録に記された数では、気仙大島において、津波の前の破船による溺死3人のみである(『大島誌』「外畑家文書」:補遺 p1010)。記録だけを見ると、人馬共に怪我が無かったという記述が多く、寛政津波よりも犠牲者は少なかったようである。

その一方、安政津波の高さは一部の地域においては寛政津波よりも高かった。気仙郡の大肝入であった吉田家の『定留』(補遺 p1008)によれば、二十三日昼八ツ頃より二十四日朝まで10回以上の津波があり、そのうちの3度は人家や田に押し上げるほどの大津波であった。長部村(陸前高田市)の低地部である「地窪之家」には一丈(3m)、そのほかの場所では板敷より五六尺(1.8m)ほどの波が押し上げている。

また、寛政津波において浸水被害のなかった今泉は、安政津波では浸水被害に遭っている。七月二十四日には、今泉は屋敷通の前庭まで押し上げ、田の被害が25貫文となり、高田村も町裏まで水が押し上げ、田の被害が24貫文であったことが知らされている。

七月二十五日には、大肝入の吉田伝之助が長部村から国崎村までを検分しているが、このときには、田畑に大きな被害があることが述べられる。人家の被害については、長部村の湊浜では、百姓家が27～28軒ほど流失、大船渡村では7～8軒流失している。また、寛政五年には浸水していなかった場所が浸水しており、安政津波では、寛政津波よりも広い範囲に津波が浸水していたと考えられる。

七月二十七日には、気仙郡の海辺の村では、人家は大破し、低地の田畑は一面に潮が入ったという被害状況が述べられる。続けて、花の頃であったため、作物がすべて潮枯れとなる不安が訴えられている。

気仙郡では、田畑に対する被害が大きかったため、

津波による損害を受けた難渋者へ穀類が支給されている。長部村など津波被害のあった五ヶ村へ、粃など穀類を無利子で借りたいという願いが出されていることが、吉田家の『定留』や、『世間風唱書之事』の記事から読み取れる。『定留』(続補遺 p747)によれば、秋には、気仙郡において 90 貫文、本吉郡の北方において 8 貫文の田畑潮入被害が報告され、大肝入である吉田伝之助は、長部村の極めて困窮の者へ 414 両、本吉郡寄津村などの者へ 76 両を安政三年十月に願っている。また、雄勝においても、山下家が極貧の者へ粃一俵ずつ 20 俵を手当した後、難渋の百姓へ粃 42 俵が藩から下賜されたことが、『山下家先祖代々記』に記録されている。

§5. おわりに

寛政地震と津波は、仙台藩領に多大な被害を及ぼした地震津波であったことがわかった。屋根瓦の落下や家屋の倒壊、津波による家屋の流失など、地震と津波の直接的な被害が大きかったといえる。地震については、宮城県北部の内陸平野部や、仙台市内など南部の平野部において、建物の倒壊が多く、それによる犠牲者など、大きな被害があった。また、地震当日から三か月にわたって、1 日あたりの余震回数が非常に多い地震であったことが特徴である。

寛政津波では、三陸沿岸から牡鹿半島にかけて家屋流失、さらに三陸沿岸において、数は不明であるが人的被害があった。また、千葉県など、宮城県より南の沿岸部においても津波による犠牲者があったことから、仙台平野の沿岸部においても、津波による人的被害があったと考えられる。

一方、安政地震の被害については、寛政地震と同様に、宮城県北部の平野部において、酒や醤油がこぼれる被害はあったが、建物の被害についての記録はなく、建物等の倒壊被害は寛政地震ほどではなかったといえる。前年の安政二年の地震の方が、被害は大きかったと考えられる。

安政津波は、広い範囲で田畑へ浸水被害を及ぼしたことから、寛政津波に比べて、津波後の人々の生活に大きく影響した災害であったといえる。津波を受けた時期が夏であったことも、被害を拡大させた要因の一つであっただろう。また、安政津波による死者は、記録に残されていない犠牲者も多かったと考えられる一方、昼であったことや、寛政地震津波の記憶が避難の動機となり、犠牲者の軽減に役だった可能性もある。

寛政地震の津波と安政地震の津波は、震源も異なり、津波そのものの性質は異なったものであっただろう。そのため、家屋の流失や溺死者数などの被害状況は異なり、人々の対応も異なった対応をしなければならなかった。被害後の救恤活動は、寛政五年には塩場の普請作業が中心であったが、安政三年には、それに加え、田畑の損害を被った者へ対して穀物が支給されたことが特徴である。これらの救恤や復興につながる人々の活動については、例えば、吉田家『定留』では、『新収日本地震史料 補遺』や『新修日本地震資料続補遺』に収録されなかった部分に、詳細な記録がある。今後、寛政地震、安政地震の両方について、『日本地震史料』(武者編, 1941, 1951)や『新収日本地震史料』(東京大学地震研究所編, 1984, 1985, 1989, 1993)等に未収録部分の情報から、地震後の対策や復興経緯について、資料より読み解いていきたい。

対象地震: 1793 寛政三陸地震津波, 1856 安政三陸(八戸沖)地震津波

文献

- 羽鳥徳太郎, 1987, 寛政 5 年(1793 年)宮城県沖地震における震度・津波分布, 東京大学地震研究所彙報, 62, 297-309.
- 羽鳥徳太郎, 2000, 三陸沖歴史津波の規模の再検討, 津波工学研究報告, 17, 39-48.
- 地震調査研究推進本部地震調査委員会, 2011, 三陸沖から房総沖にかけての地震活動の長期評価(第二版).
- 唐桑町史編纂委員会, 1968, 唐桑町史, 宮城県本吉郡唐桑町, p855.
- 宮城県史編纂委員会, 1952, 萬ふしきの事扣覚帳, 古文献資料第三.
- 森嘉兵衛, 1970, 九戸地方史[下巻], 九戸地方史刊行会.
- 武者金吉(編), 2012[1941], 復刻日本地震史料第三巻, 明石書店.
- 武者金吉(編), 2012[1951], 復刻日本地震史料第四巻, 明石書店.
- 行谷佑一・都司嘉宣・上田和枝, 2003, 寛政 5 年(1793)宮城県沖に発生した地震の詳細震度分布と津波の状況, 歴史地震, 19, 80-99.
- 瀬川修, 2012, 岩手県内の安政3年地震の地震・津

波被害について, 民俗建築, 142, 6-11.
 東京大学地震研究所(編), 1984, 新収日本地震史料第四巻, 日本電気協会.
 東京大学地震研究所(編), 1985, 新収日本地震史料第五巻, 日本電気協会.
 東京大学地震研究所(編), 1989, 新収日本地震史料補遺, 日本電気協会.
 東京大学地震研究所(編), 1993, 新収日本地震史料続補遺, 日本電気協会.
 宇佐美龍夫, 1978, 江戸時代における三陸地方の地

震活動, 東京大学地震研究所彙報, 53, 379-406.
 宇佐美龍夫(編), 1998, 「日本の歴史地震史料」拾遺四ノ下, 日本電気協会.
 宇佐美龍夫(編), 2012, 「日本の歴史地震史料」拾遺五ノ上, 日本電気協会.
 宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子, 2013, 日本被害地震総覧 599-2012, 東京大学出版会.

表 1 慶長 16 年から平成 23 年の宮城県において被害記録のある津波

Table 1 Historical Tsunamis with recorded damage to livelihoods at Miyagi coastal area from 1611 to 2011.

| 年 | 西暦 | 震源 | 宮城県内における被害 |
|---------|------|----------|----------------------|
| 慶長 16 年 | 1611 | 三陸沖 | 溺死 1738 人 |
| 延宝 5 年 | 1677 | 八戸沖 | 気仙郡で溺死 30 人 |
| 享保 15 年 | 1730 | チリ沖 | 田畑, 塩場に損害 |
| 寛延 4 年 | 1751 | チリ沖 | 石巻米蔵の米に被害 |
| 寛政 5 年 | 1793 | 宮城県沖 | 小淵 40 軒流失. 雄勝床上浸水 |
| 天保 8 年 | 1837 | チリ沖 | 田畑, 塩場に損害 |
| 安政 3 年 | 1856 | 八戸沖 | 雄勝床上浸水, 田畑被害大 |
| 明治 29 年 | 1896 | 三陸沖 | 流失 5030 戸, 死者 3452 人 |
| 明治 34 年 | 1901 | 陸中沖 | 苗代 50 町歩に被害 |
| 昭和 8 年 | 1933 | 三陸沖 | 流失 950 戸, 死者 307 人 |
| 昭和 27 年 | 1952 | カムチャッカ沖 | 仙台湾家屋浸水 |
| 昭和 33 年 | 1958 | 択捉島沖 | 気仙沼の養殖施設に軽微な被害 |
| 昭和 35 年 | 1960 | チリ沖 | 流失 186 戸, 死者 45 人 |
| 昭和 38 年 | 1963 | 択捉島沖 | 養殖施設に被害 |
| 昭和 40 年 | 1965 | アリューシャン沖 | 三陸沿岸の漁業施設に軽微な被害 |
| 昭和 43 年 | 1968 | 十勝沖 | 床上浸水 1 棟, 漁業施設に被害 |
| 昭和 44 年 | 1969 | 北海道東方沖 | 養殖施設に被害 |
| 平成 6 年 | 1994 | 北海道東方沖 | 気仙沼床上浸水, 養殖施設に被害 |
| 平成 22 年 | 2010 | チリ沖 | 床上浸水 6 棟, 養殖施設に被害 |
| 平成 23 年 | 2011 | 東北地方太平洋沖 | 死者 9537 人 |

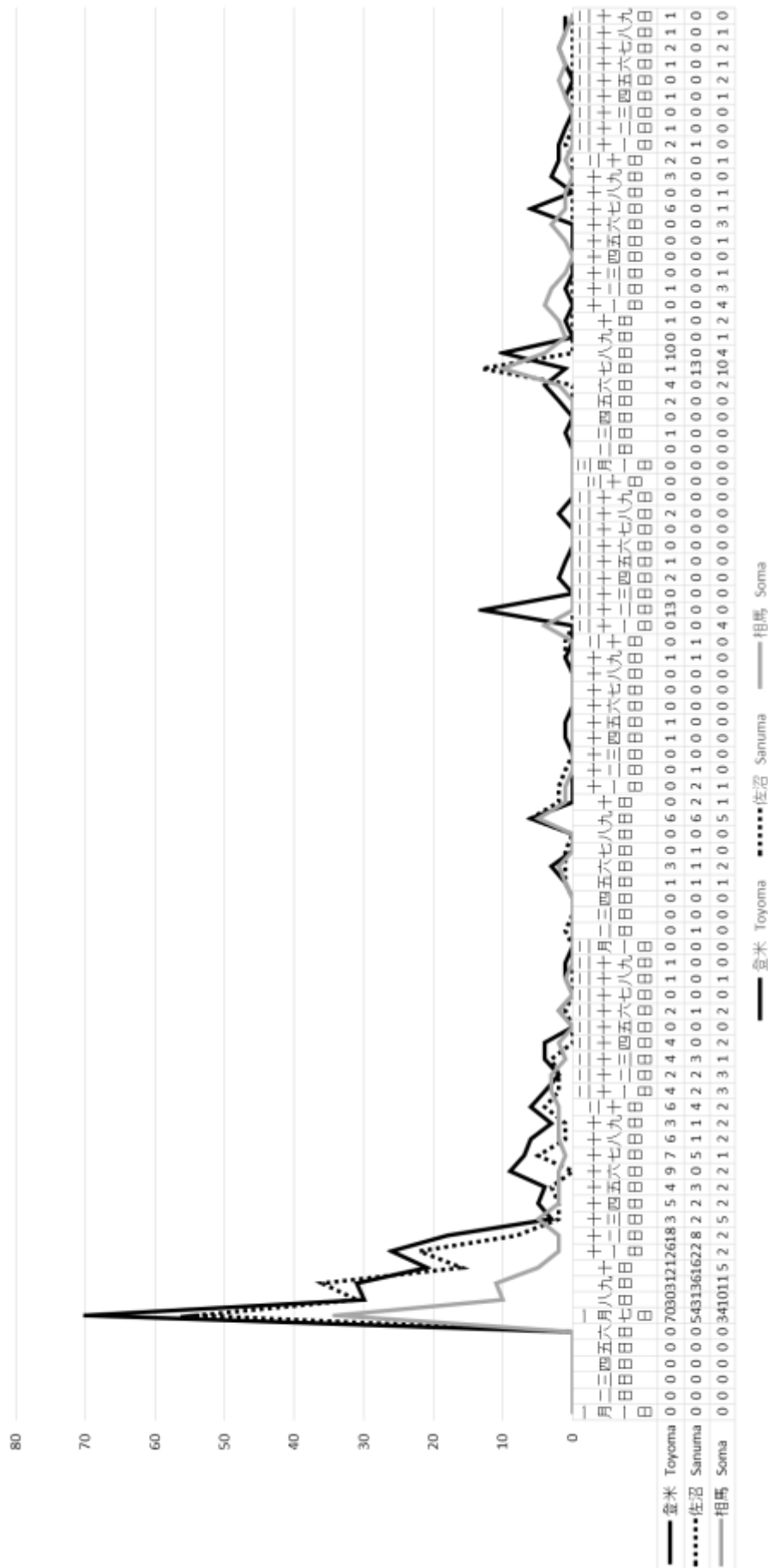


図1 登米『福久日記』、佐沼『元和元年より歳之吉凶留帳』、相馬『中村藩新妻蔭常手記』における寛政五年一月から三月までの1日における地震回数
 Fig.1. Number of daily earthquakes in 1793, from January 1st (Gregorian February 11th) through March 29th (May 9th), at Toyoma, Sanuma, and Soma.

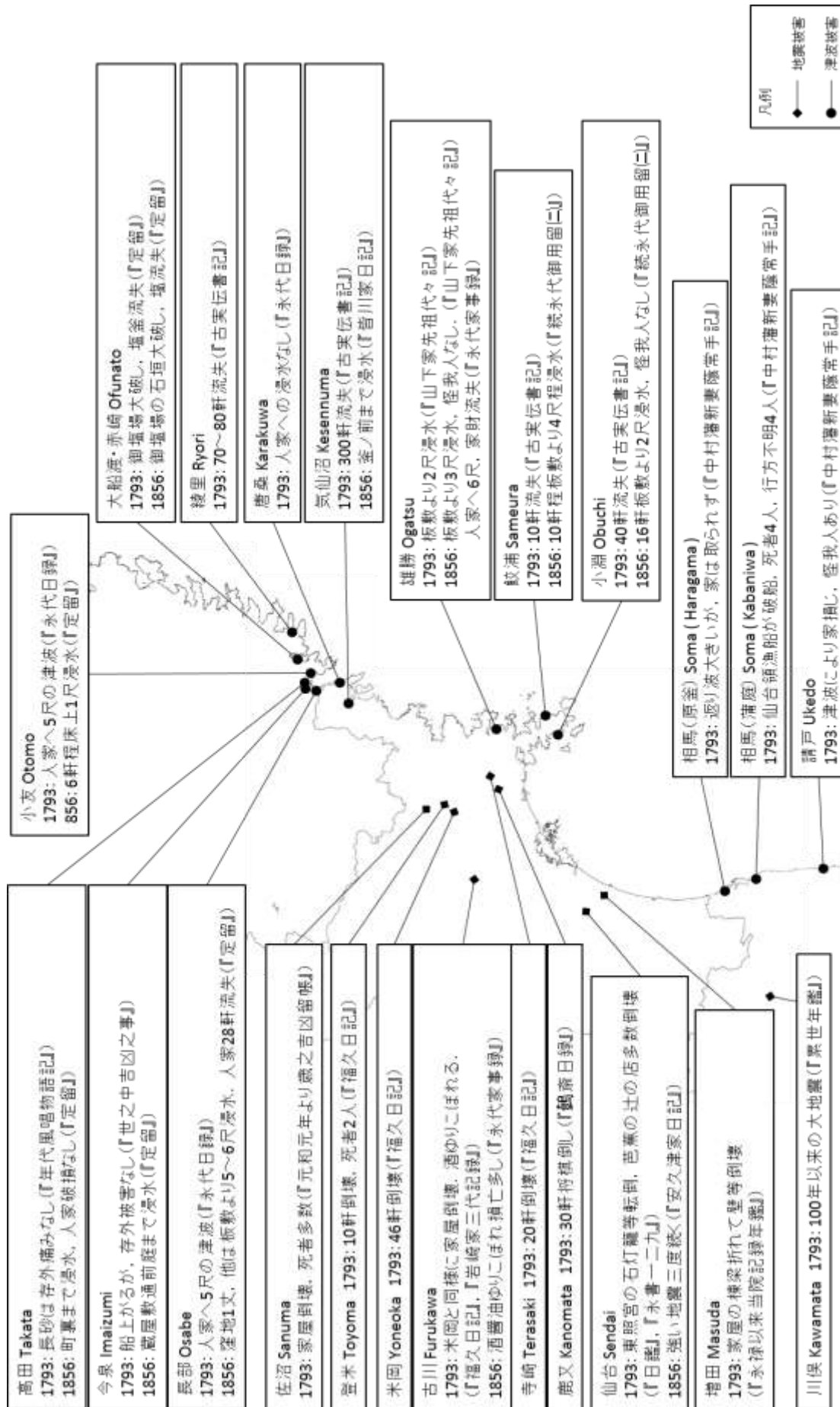


図2 仙台藩周辺の1793寛政地震と1856安政地震の地震・津波被害記録とその場所

Fig.2 Locations and articles about disasters of earthquake and tsunami, in 1793 Kansei Earthquake and 1856 Ansei Earthquake, around Sendai Domain.